

編 集 後 記

今月号のテーマは「胃の変位と変形」ということで、胃憩室、横隔膜ヘルニアと横隔膜弛緩症、それに胃軸捻転をとりあげた。これらは従来比較的めずらしいものとされていたが、最近では、診断技術の進歩と、皆が注意深くなったためか、その発見率はかなり高くなってきた。このテーマの執筆を担当された方々は、さすがに豊富な経験と資料をもっておられるなと思った。ことに胃軸捻転を書かれた金井さんは実にこまかく文献をあさっておられるのに感心した。

山田さんの書かれた直腸の診断は多くの人に読ませたいものである。直腸指診や内視鏡検査の要領など、親切、ていねい、要を得ており、大いに役立つものとなろう。

食道早期癌の報告もだんだん増えてきたが、その発見のきっかけは平田さんもいっているように、一寸した嚥下時異常感などである。また、井出さんの早期胃癌発見のきっかけは、ただ糞便潜血反応が陽性であったことだけである。このように、ほんのわずかな自覚症や他覚的所見にも、注意して気をとめるか否かが、癌を早期に発見するかどうかの別れ目になることをあらためて教えてくれた。

研究欄の鈴木さんの仕事も努力のあとがしのばれるし、また忍田さんの接写装置の工夫も立派である。

<並 木 正 義>

<編集> 早 期 胃 癌 研 究 会